



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

2016 年度人間福祉学部報

雑誌名	Human Welfare : HW
巻	9
号	1
ページ	235-248
発行年	2017-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027423

2016 年度人間福祉学部報

■社会福祉学科

今年、学科の重鎮である室田保夫先生が定年を迎えられる。先生のこれまでの人生を祝福すると共に、退職される寂しさも感じる。その日が迫るにつれ、先生の大いさを考える日が続いている。僥越ながら、この場を借りて室田先生に感謝の意を表したい。

はじめに、本学科の要ともいえる実習教育の今年度の実施状況について、伊藤安佐子助手よりデータを作成していただいたので紹介しておきたい。

- ・SW 実習：53 名（児童 10、母子 4、社協 8、公的 7、医療 5、障害 6、高齢 13）
 - ・福祉社会 FW：11 名（子育て青少年拠点夢つながり未来館 2、暮らしづくりネットワーク北芝 1、波瀬むらづくり協議会 5、釜ヶ崎 3）
 - ・精神保健福祉実習…7 名
 - ・ソーシャルワーク・インターンシップ：1 名
 - ・医療ソーシャルワーク・インターンシップ：5 名
 - ・学校ソーシャルワーク実習：6 名
 - ・大阪府福祉職場体験事業：4 名（子ども家庭センター、子どもライフサポートセンター、障害者自立相談支援センター、障害者自立センター、砂川厚生福祉センターでの職場体験）
 - ・大阪府民生・児童委員インターンシップ：12 名
- 次に教員の活動報告を紹介する。尚、紙幅の関係で一部表現を変更、敬語も略させて頂いた。

小西先生は、特別研究期間をパワフルに活動している。これまで取り組んできた HIV/AIDS ソーシャルワークでは、実践と理論を結びつけることを目標に研鑽を重ね、アドボカシーの研究では「意思決定支援」の課題に取り組んでいる。2018 年は定年を迎えるので、今年で最後のゼミ。社会福祉実践の核になるものをできる限り伝え、今後の人生に活かしてほしいそうだ。ゼミには、犯罪被害者の方や在宅透析患者さんの話等を直接聞いて学びを深める機会を提供した。

安田先生は、障害者施設と高齢者施設をフィールドに、企業で注目されている「(対話型)組織開発」を用いて、施設職員が働きやすく働きがいのある職場作りや、個人や組織の潜在力が発揮さ

れるようなチーム・職場や組織作りのお手伝いをしている。ゼミでもこの手法を用いて学部理念及び「社会人基礎力」を育成している。

松岡先生は、博士論文を加筆修正したものを 2016 年 3 月に出版した。今年は障害者差別解消条例や手話言語条例制定にも関わった経験から、行政の考え方や条例の制定過程について知ることができたそうだ。今年のオープンキャンパスの企画もゼミ生が担当し、「障害」に関する調査結果のポスター報告を行った。また日本財団の冠講座「手話言語学基礎」と「手話言語学専門」の開講に尽力し、多くの学生が手話について基礎から学べる機会が増えた。社会活動として、吹田市育成教室と「こぶたサークル」の協力を得て、障害児と高校生・大学生との交流企画も実施し、現役高校生の学びを深めた。夏は、東京の昭和大学、そして英国オックスフォード大学で多職種連携の学会、11 月は東京家政大学での障害学会に参加し、理事として運営に関わった。

池埜先生は、災害や犯罪被害など突然の強いストレスに見舞われた人々の心理、社会的影響と支援方法について、ソーシャルワークの視点からの研究を長年にわたり追及している。近年注目されているマインドフルネスを用いたトラウマ・ケアの社会福祉領域への応用方法へ関心があり、その手法を用いて、女子少年院でのプログラム実践も行っている。日本古来から伝えられるマインドフルネスの営み（禅文化、祭り等）を応用したトラウマ・ケアの可能性も検討している。2018 年度は留学予定。

芝野先生は、定年を控え、本学社会学研究科や留学時代から今日に至るまでの研究の軌跡を振り返る作業を始めている。「気が重くなる作業ではありますが、新たな発見もあり、楽しみながら作業を進めています」とのこと。公益社団法人「家庭養護促進協会」や NPO「親と子のふれあい研究会」の理事長の活動は 5 年目を迎えた。児童福祉法が大きく改正され、公民連携における民間機関の重要性を感じている。今年最後のゼミ生 13 名を担当、演習Ⅱでは全員、10 月初旬に就職が決まり、福祉職は 7 人中 1 名だった。専門職を

めざす学生は少なくなったが、「それぞれの場で福祉マインドを活かし活躍してくれるものと思っています」とのこと。

前橋先生は、子ども家庭福祉の実情や児童虐待への対応の研究に加えて、近年は要保護対策地域協議会や地域の子育て支援についても研究している。その関係で、地方公共団体の各種審議会や協議会等へもできるだけ参加している。主に3年生を対象に、児童相談所や家庭裁判所、児童養護施設や少年院などの機関や施設への見学を実施している。教え子が卒業後法科大学院に進学し、見事司法試験に合格した！との報告も受けた。プライベートでは、趣味の川釣りになかなか行けなくて、ストレスをため込んでいる。

石川先生にとって今年は激動の1年だった。2015年秋頃から持病からくる腎機能の低下が顕著になり始め、身体がしんどさの余り、思うように動かなくなった。6月中旬から週3回、人工透析を始めている。透析により体調が徐々に回復し、8月になってようやく仕事ができるようになった。「これも神様からいただいた休息の時間だと思い、ゆっくり休ませてもらっています」とのこと。ゼミでは、昨年に引き続き、3年生を連れて岡山県笠岡市の離島・白石島で合宿をし、離島問題や過疎化、高齢化問題を学生とともに肌で感じ、問題について検討する時を持った。

大和先生の最近の関心事は、介護人材の定着及び確保についてである。職場での定着という意味で、介護だけでなく地域包括支援センターの社会福祉士やケアマネジャーも研究対象にしている。また専門職団体の連絡会に参加し、地域包括支援センター内でのチームアプローチの実態と課題を研究している。今年度から学部長として多忙なため、これまでと同じように外部の研修や行政の審議会には参加できていない。しかし、第7期介護保険事業計画に向け近隣自治体での会議体に出席して、住民のために少しでもより良い制度となるよう計画策定に関わる。夏には中国の吉林大学で高齢者医療・福祉の国際シンポジウムに参加し、日本の介護保険制度の現状と課題について報告した。それを契機に来年度から中国と韓国との共同研究に取り組む予定である。

今井先生は、学内外ともに新しい環境に置かれている。学内では、Jennifer Payneさんというル

ース奨学生の指導を報告者（陳）とともに担当し、今後、講義やゼミを通じた学生との交流を楽しみにしている。学外では、日本社会福祉学会の理事として学会誌の副編集委員長を任命された。年間4冊の雑誌を発刊する重責だが、本学科の芝野先生、小西先生が長く従事されてきた職でもあり、その「伝統？」を守っていきたいとのこと。

風間先生は、1月、ゼミⅡの学生と吉野山に紅葉狩りに出かけた。当日は、天気にも恵まれ、奥千本から下千本まで6時間ほど楽しく散策。しかしその行程は、階段、坂道、山登りが中心で、翌日、身体中あり得ないレベルの筋肉痛になったそう。

川島先生は、今年からゼミの3回生が、神戸市社会福祉協議会と神戸YWCAが実施している2カ所の若年性認知症カフェの活動にボランティアスタッフとして参加している。一見すると当事者とはわからないような方も多く、高齢者とは異なるニーズを持つ若年性認知症の当事者と家族とのかかわりを通じて、学生は多くのことを学ばせてもらっている。

今年着任された2名の先生の紹介をする。橋川先生は、日々の教育と研究の他に9月に日本社会福祉教育学会、2017年3月の関西社会福祉学会の世話役として活躍している。また夏には、大阪府の「民生委員・児童委員活動の見える化プロジェクト」に協力し、学生11名を送り出し指導にあたったが、その様子はNHK等のメディアにも取り上げられ話題になった。澤田先生は、授業で「認知症サポーター養成講座」を実施し135名が認定を受けた。7月には日本ソーシャルワーク学会、9月には日本社会福祉学会で特養のケアワーカーの看取りについて発表している。また、宝塚市のケアプラン研修事業、摂津市では認定審査など高齢者介護の現場で活躍している。

最後に退職される室田先生からメッセージを頂いた：今年度で関学の講義も最後です。1999年4月に社会学部に新設された社会福祉学科に迎えられたのが関学との最初の出会いでした。社会学部9年間、人間福祉学部9年間の18年間、お世話になりました。この間、多くの学生や先生との出会いがあり、ただただ感謝の言葉しかありません。バス停を降り美しい芝生と時計台を見ながらの登校は心洗われるような気持ちでした。今後の学部の発展を祈念いたします。（陳 礼美）

■社会起業学科

人間福祉学部社会起業学科が開設され、9年目を迎えました。本年度は70名の1年生が新たに加わり、2年生73名、3年生74名、4年生97名、総勢314名でスタートしました。そして、田原慎介助教、林裕助教が仲間に加わったことで、本学科の教育・研究に厚みと活気がさらに増しました。

人間福祉学部が開設された2008年度以降、社会起業学科ではさまざまな取り組みを行ってきました。反省点や課題を残すこととなった取り組みもありましたが、それらを教職員のみならず、時には学生とも共有しながら改善することにより、魅力的な取り組みとなるように努めてきました。本年度も学科の特色を反映した取り組みを数多く実施しましたので、その概要を下記に示します。

①社会起業学科新入生歓迎プログラム「社起やDAY!2016」

社会起業学科では、新入生歓迎プログラムとして、「これが社起やDAY」を毎年4月に実施しています。これは、「社会起業に関する学びと学生間交流」、「学科への求心力の向上」を目的としており、「学び」の部分では、授業紹介やゲストスピーカーの講演等を行い、「交流」の部分では、共に身体を動かしたり、食事をしたりして交流を深めています。今年度の概要は下記の通りです。

- ・日 程：2016年4月9日（土）
- ・会 場：関西学院大学 G 号館および学生会館 新館 1F OFF TIME
- ・参加者：1年生57名、学生スタッフ10名（2年生）
- ・内 容：礼拝、社会起業学科卒業生による講演、授業紹介（実践教育関連）、レクリエーション、懇親会
- ・ゲスト：岸田奈美（3期生）、村林怜（4期生）

②社会起業英語中期留学

社会起業学科の独自プログラムである英語中期留学（カナダ・クイーンズ大学 School of English）に、2年生8名、3年生1名の合計9名が参加しました。8月6日、参加者全員がプログラム

を修了し、無事帰国しました。今年度は Intermediate Level 1 クラスに所属していた東矢えれなさんが成績優秀者に贈られる Student Achievement Award を受賞しました。自らの学びにおいて、大きな自信、収穫を得ることができた研修になったと思います。なお、「参加学生の声」を人間福祉学部の HP にて掲載しています。（http://www.kwansei.ac.jp/s_hws/s_hws_m_001082.html#53222）

③社会起業インターンシップ

1) 国内インターンシップ

今年度は3名の学生が国内インターンシップに取り組みました。国内の NPO 法人において、3年生の夏季休暇中に3週間の日程で行いました。インターンシップ先は下記の通りです。

- ・認定 NPO 法人 夢街道国際子ども交流館
- ・NPO 法人尾道空き家再生プロジェクト
- ・公益財団法人 あすのば

2) 海外インターンシップ

今年度は3名の学生が海外インターンシップに取り組みました。海外での社会貢献活動について学ぶこと、海外での実践力を高めること、異文化の環境のなかで働く能力を養うこと、社会の問題と課題を把握し取り組む能力を高めること、を目標に、夏季休暇中に6週間のインターンシップを行いました。インターンシップ先は下記の通りです。

- ・The University of Northampton（イギリス）
- ・McIntire Center/ Sporting Wheelies and Disabled Association（オーストラリア）

④社会起業フィールドワーク

1) 国内フィールドワーク

今年度は41名の学生が国内フィールドワークに取り組みました。“現場から学ぶ社会起業の課題と取り組み”として、街に出て、社会的課題に直面している当事者の方や問題解決に向けて取り組みを行っている社会起業家にお会いしました。その中で、問題解決に取り組む姿勢を学び、人との会い、質問しながらお話を聞き、それをまとめて整理し、他人に伝える技術を獲得することを目的に、団体を取材させていただき、その様子を示す

ビデオを作成しました。インターンシップ先は下記の通りです。

- スワン カフェ&ベーカリー大東店
- NPO 法人暮らしづくりネットワーク北芝
- NPO 法人 Homedoor
- WORKMATE KOBE

2) 海外フィールドワーク

今年度は16名の学生が海外フィールドワークに取り組みました。“現場で学ぶ国際協力”をテーマに、タイを訪れました。貧困や民族、開発の問題について、現地に自らの身を置いて、問題を肌で感じるフィールドワークを実施しました。タイにおける主なフィールドワーク先は下記の通りです。

- Assumption University
- アーク 移動図書館
- 国連
- 国際協力機構

⑤実践教育報告会

人間福祉学部各学科の実践教育を報告する場として、実践教育報告会が12月10日(土)に開催されました(G号館201号、202号教室)。本学科からも、フィールドワーク、インターンシップ等の実践教育科目に取り組んだ学生が、ポスター発表形式で報告を行いました。3学科合同開催で

あるため、他学科の学生との意見交換や情報共有も活発に行うことができ、自らの関心領域を広げることにつながったと思われます。

⑥オープンキャンパスでの社会起業学科イベント

8月6日(土)～7日(日)の日程で、関西学院大学上ヶ原キャンパスのオープンキャンパスが開催されました。本学科からは、「スポーツのチカラ～スポーツで社会起業を考える～」(林直也先生)と「食品ロスと社会起業」(山本隆先生)、の講義を行いました。外国人女性雇用支援のためのフェアトレードおよびカフェも大盛況に終わりました。また、10月22日(土)に開催されたオープンキャンパスでは、「居場所と出番～サードプレイスってなに～」(牧里毎治先生)の講義を行いました。

⑦2年生の秋の学年コンパ

社会起業学科では、毎年2年生を対象に、「研究演習Ⅰ」の選択に向けた懇親会を実施しています。教員と直に話ができるいい機会であり、学生たちから好評を得ている取り組みです。本年度は、10月5日(水)に「Spoon Café」で開催予定でしたが、台風による暴風警報のため残念ながら中止になりました。

(大熊省三)

■人間科学科

人間科学科が開設されて9年目の今年度、102名が新生として加わり、2年生93名、3年生109名、4年生132名の総勢436名でスタートしました。前年度の卒業生（5期生）は95名で、卒業後の進路は、一般企業（金融・保険、製造、卸売など）、公務員、教員、医療・福祉など、多岐に渡っています。就職を希望する学生における就職決定者の割合、いわゆる就職率は人間福祉学部全体で98.3%と、昨年度に引き続き高水準で推移しています。教員は12名で、今年度から助教であった市瀬明子先生が専任講師となりました。

人間科学科では、ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）として「人間科学に関する専門的知識を身につけ、質の高い生活と社会の実現に貢献できる」ことを掲げており、具体的には死生学・スピリチュアリティを中心とした学問分野、身体運動科学・身体パフォーマンスを中心とした学問分野の両領域、すなわち「こころ」と「身体」の両面から人間を深く理解することを学生の学修成果の目標としています。この方針に基づき、カリキュラムが編成されており、「人間科学入門」「人間科学実習入門」「人間科学フィールドワーク入門」「人間科学フィールドワーク」といった人間科学科独自の科目も開講されています。今年度の授業の概要を以下に紹介します。

「人間科学入門」

1年次春学期の必修科目であり、人間は、その誕生から死に至る様々な局面において、どのようなことを経験し、こころと身体がどのように変化していくのかという点について、学科の全教員がオムニバス形式で授業を担当しています。今年度

は、各教員の専門分野に応じて、「誕生」「発育発達と運動」「子どものウェルビーイングと家族環境」「悩み」「素質」「指導者」「身体運動の魅力」「運動と健康」「結婚」「死別」「老い」「死」という各回のテーマを設定し、授業が行われました。「人間科学実習入門」

2012年度に新設された1年次秋学期の必修科目であり、学科教員によるオムニバス形式の授業に加え、合宿を例年行っています。今年度の合宿は、10月1日（土）～2日（日）の日程で、昨年度と同様、淡路島の国立淡路青少年交流の家で実施されました。1日目は開講式・アイスブレイクの後、午後からは身体系プログラムとして、心拍計を装着し、決められた数カ所のポイントを辿り、往復約7kmを歩くという「チャレンジハイク」が行われました。夕食後にはこころ系プログラムとして、少人数のグループに分かれて、作業を無言で行うというルールのもと、グループ単位で模造紙2枚分の台紙に色紙を切り貼りするという「合同色紙コラージュ」を行いました。2日目は午前中に、まずは身体系プログラムとして前日のチャレンジハイクで得られた心拍数データの分析に関する講義が行われました。続いて、こころ系プログラムとして、「自分とはなにか？」について各グループに分かれて話し合いをしました。昼食後に閉講式を行い、行きと同様、参加学生109名はバス3台に分乗して帰途につきました。「人間科学フィールドワーク入門」

現場での実習に向けての前段階として、必要な基礎知識を学ぶための科目として、2年次春学期に開講しています。今年度は開講曜日・時限を、昨年度の木曜1限から火曜3限に変更したこともあって、履修登録者が昨年度の20名に対して、76名と激増しました。この授業では、フィール



ドワークの心得や記録の書き方などを学んだうえで、希望する実習先でのフィールドワークプランを作成し、体験実習を行います。今年度は、「さぼさぼ」「三光塾」「ヴォーリズ記念病院ホスピス希望館」「長野総合スポーツクラブ」「プロポーションアカデミー」「生野コリアタウン」「あおぞら色彩楽園」「あしや音楽療法」「レインボーハウス」などの実習先を訪問させていただきました。「人間科学フィールドワーク」

人間科学科での学びの集大成ともいえる科目であり、実際のフィールドでの実習を通して、こころと身体の両面からの人間への深い理解と支援のあり方を体得するとともに、自己への洞察を深めることを目的としています。多数の履修者を想定した科目ではありませんが、今年度は残念ながら実習を希望した学生が1名のみでした。この学生は、親を亡くした遺児に対する学習支援や心のケアプログラムを行っている「神戸レインボーハウス」を実習先とし、約5ヵ月間にわたるフィールドワークを行いました。なお、この科目では、履修者以外も受講できる特別講義を随時実施しており、今年度は佐藤まどか氏「遺族として支援者として自死を考える」、坂下裕子氏「愛する人を亡くすということ」、藤井昌子氏「絵で再生する子どもの心」の3名をお招きし、お話を伺いました。

授業以外では、8月6日（土）、7日（日）に開催された西宮上ヶ原キャンパスでのオープンキャンパスにて、学科独自イベントとして、学科の学びに関するパネル展示に加え、「こころカフェ」「あなたの筋肉量や栄養摂取量はどれくらい？」「入棺体験」を実施しました。その概要は以下に示すとおりです。

《こころカフェ》

虐待やいじめ、自死、ターミナルケア、生きがいなどのテーマを通して「生きること」、「ここ

ろ」について、本学の院生や学部生と、来場した高校生が自由に語り合うことのできる「こころカフェ」を、昨年度の引き続き、実施しました。開催日時は、6日（土）の11:40~12:30と14:00~14:50の2回開催で、来場者数は96名と昨年を上回る盛況でした。

《あなたの筋肉量や栄養摂取量はどれくらい？》

来場者の筋肉量や体脂肪量を測定するとともに、その値を評価し、身体の左右差などについて本学の院生や学部生などが解説しました。加えて、栄養摂取量の調査も行いました。この学科独自イベントは例年、大人気で、今年度は7日（日）の13:00~15:00の2時間のみの開催でしたが、行列が途切れることはなく、来場者数は170名でした。

《入棺体験》

昨年、一昨年に引き続き、大手葬儀社の（株）公益社の協賛を得て、本物の棺を2基お借りし、入棺体験を実施しました。7日（日）の11:00~15:00の4時間で、入棺体験を行った人は139名でした。体験後のアンケートでは、回答者の約7割が「体験中に“死んだ人の気持ち”について考えた」と回答しています。また、6割以上が「この体験を誰かに勧めたい」とも回答していました。

人間科学科では、今年度末をもって、中塘二三生教授と才村純教授が定年退職をされます。両先生は本学科の開設時からのメンバーで、9年間にわたり、学科の運営や発展に多大な貢献をされました。また、実習関係で4年間にわたって大変お世話になった日下田愛実習助手も退職されます。紙面をお借りして、中塘先生と才村先生、日下田さんに心より感謝申し上げます。今後とも人間科学科を温かく見守っていただきますよう何卒よろしくお願いいたします。

（坂口 幸弘）

■言語教育

・必修英語科目

人間福祉学部では、必修外国語科目として英語講読と英語表現を設けています。学生の習熟度と第2外国語の選択科目に対応するため、クラス数は15となっています。流暢さの向上と素早く的確に情報を読み取る能力を養うために英語講読で行っている多読課題は、副読本の拡充と管理の適正化をはかり、学年により図書館蔵置のものと、学部資料室蔵置のものとを使い分けています。専門教育へのスムーズな橋渡しを図るために人間福祉学部の社会福祉・社会起業・人間科学3学科と英語科の教員が分担執筆したテキスト（『Living in Society: From People to Persons』2011年1月、南雲堂）を昨2015年度まで2年次の英語講読で使用してきましたが、今年度からは内容の刷新と時代のニーズへの対応をはかって新たに編纂された教科書（『English for Human Welfare Studies』2016年1月、朝日出版社）を使用しています。題材の提供にはやはり本学部の教員があたりました。また1年次の英語表現でも、本学部の英語教育方針を反映したシラバスに沿う授業進行をはかるため、本学部英語教員が作成した教科書（『English Beams』2016年1月、金星堂）を使用しています。

より英語力を高めたい学生には、必修英語科目に替えて受講できる科目が別途言語教育センターから用意されており、一定の要件を満たせば1年生春学期、または1年生秋学期から開講されるコースを履修することができます。なおこれらのコースを受講する場合、後述の人間福祉学部が提供する英語コミュニケーションを第2言語として選択することはできません。外国人留学生には日本語Iを必修科目として開講しています。

・第2言語科目

選択必修の第2言語としては、人間福祉学部が用意する英語コミュニケーション、日本手話、および言語教育センターが用意するスペイン語、フランス語、ドイツ語、中国語、朝鮮語のうちの1言語を1・2年次4学期間履修することを義務付けています。原則として途中で言語を変更するこ

とは認めていません。なお外国人留学生用選択科目として基礎英語を用意しています。以下に①英語コミュニケーション、②日本手話、③スペイン語についての概略を紹介します

①英語コミュニケーションの授業では英語による異文化間コミュニケーション能力育成と多文化共生意識の涵養をはかり、これまでに多方面のゲストスピーカーを招いた授業や交換留学生との交流を取り入れた授業も行ってきました。今年度も次のようなプログラムを行うことができました。

まず6月には Learning Technologist（学習技師）である福知山公立大学のエリック・チャールズ・ハーキンソン氏を招き、Augmented Reality（拡張現実）を駆使したデモ授業をしていただきました。（写真1）

同じく6月には本学の日本・東アジア研究プログラム（JEASP）に参加している交換留学生を招き、異文化理解を相互にすすめながら、コミュニケーションの楽しさを実感できる交流授業を実施しました。（写真2）

また11月には東洋学園大学英語教育開発センターの Jason Pratt 氏をゲストスピーカーとして迎え、国際平和を深く考えさせる授業を行っていただきました。

②本学部の設置趣旨に沿い実施されている日本手話では、学年の約1/3にあたる約100名の学生が受講しています。

手話実技では学生一人当たり一定の空間が必要となるため、1クラス15名に限っています。週2コマのうち1コマをネイティブ・サイナーの講師による実技学習に充て、もう1コマを聴





者講師による「ろう文化概論」「日本手話概論」「読解」といった講義に充てています。

実技学習は、手話で手話を教えるダイレクトメソッドを採用し、幼児の言語習得原理と第二言語習得に基づくナチュラルアプローチ法を中心に進めています。実技学習（もしくは実技の授業）では音声は禁止され、音声日本語の干渉を受けない環境の下で手話習得を促進し、同時にろう者の基本的会話のルールを学んでいきます。講義の授業では、ろう者のゲストスピーカーを招いていますが、その様子を録画し、資料室で閲覧可能にしています。授業で学んだ日本手話を活用できる機会として、ろう者を招いての交流会、有志による施設見学なども実施しています。

2年次の秋には、グループによる日本手話やろう文化に関する「日本手話研究発表会」を開催し、音声日本語でプレゼンする際の手話通訳の利用方法を学ぶ機会を設けています。

③スペイン語は言語教育研究センターが提供している科目であり、全学共通カリキュラムにより運営されています。スペイン語圏でも特に中南米は、貧困などの多くの社会問題を抱えている点、また近年急速に発展し、今後日本との貿易・交流が見込まれる地域が増加している点など、人間福祉学部の学生が学んでいる事柄を活かせるフィールドであると言えます。また、日本国内にも中南米出身者が多く在住し、スペイン語や近縁のブラジル・ポルトガル語文化への理解が地域社会の福祉を考える上で必須となっています。そのためスペイン語科目の2年間の履修期間が終了するときには、自分自身や自分自身を取り巻く事柄を簡単なスペイン語で表現でき、辞書を使えば、本やインターネットなどで自分に必要な情報を得ることができるようになることを学習目標としています。授業は週2回開講されていて、1クラスは日本人教員が主に文法を教え、もう1クラスはネイティブ教員が会話や言語運用の授業を行っています。

人間福祉学部では、例年30名前後の学生がスペイン語を履修しています。最初はなじみある英語とは異なるスペイン語の特性を難しく感じてやる気をなくす学生もいますが、1年目の秋に入ると、複雑な動詞の活用にも慣れてきて、「面白くなってきた」と熱心に勉強し始める学生も少なくありません。授業ではスペイン語で意思伝達や情報収集ができる学生の育成に重点を置いてはいますが、スペイン語圏やスペイン語圏出身者に関する情報を常に与えて、学生たちにとって身近な問題として考えるきっかけづくりができるように努力しています。おかげでスペインへ短期の語学研修に行く学生が毎年数名おり、なかには1年間の留学を果たす学生もいて、スペイン語圏の多様な文化に触れ、人々と交流して意義深い体験をして帰国しています。

（文責：福居誠二）

■チャペル

日時	奨励者（奉仕団体）	主題（内容）
4月8日（金）	嶺重 淑（宗教主事）	チャペル・オリエンテーション①
11日（月）	嶺重 淑（宗教主事）	チャペル・オリエンテーション②
13日（水）	嶺重 淑（宗教主事）	「地の塩として」+ハンドベル演奏
15日（金）	広瀬康夫（吉岡記念館職員）	讃美歌を歌おう①
18日（月）	広瀬康夫（吉岡記念館職員）	讃美歌を歌おう②
20日（水）	ハラスメント講演会のため実施せず	－
22日（金）	藤井美和（人間科学科教員）	「生きること」
25日（月）	グリークラブ	音楽チャペル
27日（水）	嶺重 淑（宗教主事）	イースターを覚えて
29日（金）	聖歌隊	讃美歌を歌おう③
5月2日（月）	爆破予告のため中止	－
4日（水）	同上	－
6日（金）	同上	－
9日（月）	川島恵美（社会福祉学科教員）	出会い①
10日（火）	大学合同チャペル第1日	於）中央講堂
11日（水）	大学合同チャペル第2日	於）中央講堂
13日（金）	中野陽子（英語科教員）	出会い②
16日（月）	ゴスペルクワイア（POV）	音楽チャペル
18日（水）	学部合同チャペルに合流	LGBTを覚えるチャペル
20日（金）	ユースボランティアによるチャペル	活動報告
23日（月）	J. メンセンディーク（宗教センター宗教主事）	「嵐に負けないで」
25日（水）	バロックアンサンブル	音楽チャペル
27日（金）	上ヶ原ハビタット	活動報告
30日（月）	混声合唱団エゴラド	音楽チャペル
6月1日（水）	宣教師によるチャペル	於）中央講堂
3日（金）	井出 浩（人間科学科教員）	出会い③
6日（月）	坂口幸弘（人間科学科教員）	出会い④
8日（水）	嶺重 淑（宗教主事）	賛美歌練習
10日（金）	木原桂二（北山バプテスト教会牧師）	「永遠とは何か」
13日（月）	川崎真理子（英語科教員）	出会い⑤
15日（水）	宗教総部献血実行委員会	夏の献血週間を覚えて
17日（金）	井上 智（神学部助教）	「主に委ねる」
20日（月）	小西砂千夫（社会起業学科教員）	「安心安全な社会はない」
22日（水）	聖歌隊	音楽チャペル
24日（金）	孫 良（社会起業学科教員）	出会い⑥
27日（月）	村上陽子（スペイン語科教員）	出会い⑦
29日（水）	嶺重 淑（宗教主事）	「タラントを活かして」
7月1日（金）	ハンドベルクワイア	音楽チャペル
4日（月）	嶺重 淑（宗教主事）	出会い⑧
6日（水）	今井小の実（社会福祉学科）	出会い⑨
8日（金）	陳 礼美（社会福祉学科）	出会い⑩
11日（月）	A. Hasain（英語教員）	出会い⑪
13日（水）	大和三重（学部長）	春学期最終チャペル

日時	奨励者（奉仕団体）	主題（内容）
9月21日（水）	嶺重 淑（宗教主事）	「新しい旅立ち」
23日（金）	嶺重 淑（宗教主事）	DVD：「映像で見る関西学院の歴史」
26日（月）	筒井信行（四条畷教会牧師）	「人生の灯」
28日（水）	嶺重 淑（宗教主事）	創立記念日を覚えて
30日（金）	宗教総部献血実行委員会	秋の献血週間を覚えて
10月3日（月）	田村久瑠美（止揚学園職員）	「共に生きることと私－止揚学園の職員として」
5日（水）	嶺重 淑（宗教主事）	「隠された宝」
7日（金）	才村 純（人間科学科教員）	最終奨励「職業人生を振り返る」
10日（月）	大石健一（茨木春日丘教会牧師）	「枠を超えて心に響く表現とは」
12日（水）	小西砂千夫（社会起業学科教員）	「招かれる者は多いが」
13日（木）	大学合同チャペル第1日	於：中央講堂
14日（金）	大学合同チャペル第2日	於：中央講堂
17日（月）	武田 丈（社会起業学科教員）	出会い⑫
19日（水）	嶺重 淑（宗教主事）	「時を知る」
21日（金）	New Directions	音楽チャペル
24日（月）	橋川健祐（社会福祉学科教員）	出会い⑬
26日（水）	嶺重 淑（宗教主事）	賛美歌練習
28日（金）	聖歌隊	音楽チャペル
31日（月）	嶺重 淑（宗教主事）	宗教改革記念日を覚えて
11月2日（水）	嶺重 淑（宗教主事）	「自分を愛するように」
9日（水）	バロックアンサンブル	音楽チャペル
11日（金）	市瀬晶子（人間科学科教員）	出会い⑭
14日（月）	ハンドベルクワイア	音楽チャペル
16日（水）	宗教総部	活動報告
18日（金）	上ヶ原ハピタット	活動報告
21日（月）	牧里毎治（社会起業学科教員）	最終奨励「福祉へのまなざし」
25日（金）	米田友里子（教務補佐）	クランツ作り&ツリー飾り付け
28日（月）	嶺重 淑（宗教主事）	アドベントを覚えて
30日（水）	嶺重 淑（宗教主事）	クリスマス賛美歌練習
12月2日（金）	梶原直美（教育学部宗教主事）	出会い⑮
5日（月）	大学合同アドベントチャペル	於：中央講堂
7日（水）	室田保夫（社会福祉学科教員）	最終奨励
9日（金）	福居誠二（英語科教員）	最終奨励「クリスマスにはハートを贈ろう」
12日（月）	ゴスペルクワイア（POV）	音楽チャペル
14日（水）	人間福祉クリスマス・リハーサル	－
16日（金）	人間福祉学部生によるゴスペル演奏	音楽チャペル
19日（月）	嶺重 淑（宗教主事）	「静かなクリスマス」
21日（水）	人間福祉クリスマス礼拝 三ツ本武仁（香里教会牧師）	「まことの光に照らされて」
1月6日（金）	大和三重（学部長）	最終チャペル
11日（水）	震災を覚えるチャペル	於：ランバス記念礼拝堂

＊上記の通り、2016年度は、春学期39回、秋学期40回、計79回（合同チャペルを含む）のチャペルアワーを実施した。出席者はほぼ例年並みで、特に各種音楽団体による音楽チャペルには毎回多数の出席者が見られた。奨励の多くは人間福祉学部の教員が担当したが、今年度は昨年度に続いて「出会い」という共通テーマを設定し、計15人の先生方にこの主題で奨励していただいた。来年度は今年度の反省を踏まえ、さらに充実したチャペルプログラムを提供できるよう努めていきたい。

※2016年度クリスマスチャペル報告

学部のクリスマスチャペルは例年と同様、クリスマス礼拝とクリスマス祝会を分けて実施し、クリスマス祝会を12月14日（水）の夕刻（18:30～20:20）に昨年と同様、学生会館新館 OFF TIME で開催し、クリスマス礼拝は12月21日（水）の通常のチャペルアワーの時間帯（10:35-

11:05）に実施した。クリスマス祝会では、最初に短く礼拝の時間を持ち、ハンドベルクワイアの演奏を聴いた後に「祝会」の部に移り、学生・教職員が軽食をともにし、漫才、混声合唱団エゴラドによるクリスマス曲等の演奏、大和学部長扮するサンタからのプレゼントに興じたりしながら、楽しいひとときを過ごすことができた。また、クリスマス礼拝は人間福祉学部チャペルで静かに守り、日本キリスト教団・香里教会牧師の三ツ本武仁先生より「まことの光に照らされて」という題で奨励して頂いた。

参加者はクリスマス祝会が100余名、クリスマス礼拝の出席者は約50名で、例年とほぼ同数であった。特に祝会については、開催時期や内容等、様々な課題もあるが、来年は今回の反省点を踏まえて、会場やプログラム内容等を今一度検討し、より親しみやすいものになるように工夫していきたい。

（嶺重 淑）

■外国人留学生懇談会

2016年度「外国人留学生懇談会」を開催

外国人留学生（学部・大学院）と教職員による「外国人留学生懇談会」（ランチミーティング）を2016年6月8日（水）・17日（金）の昼休みに開



催しました。

昨年度に引き続き、本年度も昼食を交えながら、外国人留学生が日本での留学生生活をより充実

したものとして送ることができるように、日頃感じていることや研究内容、進路などをざっくりばら



んに教職員と話せる機会としました。

2日間あわせて約30名の参加を得て、和やかな雰囲気の中、様々な話題で盛り上がり、学生・教職員の双方にとって有意義なひとときとなりました。

（山 泰幸）

■人間福祉学部優秀卒業研究賞「あじさい賞」

人間福祉学部では、故 浅野仁名誉教授の寄付により、優秀な卒業研究を執筆した学部学生の努力を称えるため、優秀卒業研究賞（通称「あじさい賞」）を設けています。

名前の由来は、あじさいを同氏が好まれたことによります。

最優秀賞・優秀賞には表彰状と副賞（図書カード10,000円）が贈られます。

2015年度の受賞者は次のとおりです。

・最優秀賞

該当者はありません

・優秀賞

日野 美里

精神保健分野における医療と福祉の連携による高齢精神障害者への支援のあり方の検討－地域移行・退院支援からみえる多職種連携の課題－

竹村 碧

DV防止法に基づく保護命令制度の国会会議録・都道府県基本計画分析

有本 知可

スクールソーシャルワークのいじめ問題へのアプローチの再考

人間福祉学部優秀卒業研究賞規程

（目的）

第1条 学校法人関西学院は、浅野仁氏（本学名誉教授）よりの寄付金をもって、人間福祉学部優秀卒業研究賞を設定する。

2 この賞は、人間福祉学部学生の学習・研究意欲を高め、勉学の向上をはかることを目的とする。

（資格及び交付）

第2条 この賞は、毎年人間福祉学部において優秀な卒業論文等を執筆した学生に授与する。受賞者を毎年若干名とし、受賞者には賞状と副賞を授与する。

（所管及び運営）

第3条 人間福祉学部に優秀卒業研究賞（浅野賞）選考委員会を設け、受賞者の選考に当たる。

2 選考委員会の構成及び選考方法については別に定める。

（規程の改廃）

第4条 この規程の改廃は、選考委員会の議を経て、人間福祉学部教授会で決定し、理事会の承認を得るものとする。

附 則

この規程は、2011年（平成23年）4月1日から施行する。

■関西学院高等部 アクティブ・ラーニングで学ぶ選択科目「人間福祉」授業報告

関西学院高等部は、選択科目を開講する高等学校として先駆的な歴史がある。その開講目標は、大学受験を最優先にするのではなく、大学教育を受ける学問的な素養を身につけることである。多感な時期を過ごす三年生が、自ら選んだ科目を意欲的に学べるように、週3コースから各一講座（火・水・木曜日の午後から連続2時間）履修できる。すべての講座が希望通りに選択できるとは限らないが、教科の必修授業を専門的もしくは復習として学ぶ科目や、大学教育への入門科目が幅広く用意されている。

大学関連科目の一つである「人間福祉・教育学入門」は、前半に「人間福祉学」、後半に「教育学」に分かれ、通年の授業として開講されている。「人間福祉学」では、人間福祉学部設立の教育理念（3つのC：Compassion, Comprehensiveness, Competence）を踏まえながら、本学部の魅力や進学後の可能性を紹介しつつ、Well Being（しあわせに生きる存在）を実現するために身近なテーマから自己の発見、他者とのつながりや多様な生きものとの共生、いのちの尊厳についてアクティブ・ラーニング型の授業を行っている。近い将来、彼らが進学した学部（もしくは他大学）で、関西学院高等部卒業生として一人ひとりが地球市民という視点に立ち、真なる Well Being を追求しながら自らの可能性を社会貢献に広げられる“気づき”の場になるような意図がこの授業にある。

毎年、ユニークな履修生が集まり、初日は自分に向き合うワークから始まり、テーマごとにグル



アイマスク体験

ープ・ワークに展開する。授業に慣れはじめた5月連休直後、多くの履修生がもつ「福祉」に対する固定観念を覆す授業が、アイマスク&車椅子体験である。特定非営利活動法人メインストリーム協会の協力を得て、介助利用者と介助者から「利用者の生活」について話を聞いた後、履修生たちはペアを組んで介助利用者と介助者の両者の立場を体験する。授業後の感想文では、介助利用者の実生活を知って「24時間人工呼吸器をつけていても自分の選択で海外にも行けることに驚いた」「介助利用者は可哀そうだと思っていたが、それは自分の思い込みだった。介助を利用することで自立した生活ができ、自分らしく生きることができることを知った」「介助利用者の方々が、健常者と同じように自分の時間を楽しんでいる」、そしてアイマスク&車椅子体験では、「アイマスクを着用した瞬間から脱着するまで怖かった」「利用者として車いすに乗ってみて（介助者として利用者を乗せてみて）、今まで当たり前のように歩いていた校内の道が、こんなに段差や坂道が多いことに気づいた」という声が多く上がる。例年、この体験授業を境に、履修生たちが授業に対して意欲的になり、積極的な発言やディスカッションに展開する。自分たちの校内で介助利用者と介助者を体験することで、他者（もの）の視点に立って考えることができるようになっていくのである。

特に今年度は、「らい予防法廃止20年」をテーマに“外見（美醜）”という視点から自分たちを内省し、自らの偏見の思考・行為と社会とのつな



車いす体験

がりについて考え直した。そして授業最終日は、履修生一人ひとりが乳幼児期の写真を持参して自らの誕生ライフストーリーから将来を展望し、いのちのつながりを確認した。

今後の課題として、ハンセン病問題については、他の「人間福祉学」に関するテーマと関連しながら継続して取り上げていきたいと思う。なぜなら、日本におけるハンセン病問題は負の歴史を刻んだ遺産に値しているにもかかわらず、学校教育や社会での啓発が不十分であるために忘れ去られようとしている。しかし、ハンセン病問題の歴史的歩みから「人間福祉」を学ぶ要素は数多くあ

る。長年、関西学院 OB・OG と関西学院教職員がハンセン病患者・元患者に寄り添ってきた意義を語り継ぐことは、今後、私たちが直面するかもしれない問題に気づき、課題解決に導くヒントを投じる事例になるだろう。また来年から高等部は男女共学完成年度にあたるため、ジェンダーという視点も授業のテーマに取り上げる必要がある。関西学院高等部の伝統と革新を組み入れながら、**Mastery for Service** という建学の精神を高等部生たちと共に追求したい所存である。

(奥野アオイ)